家族ががんに罹患することによる「家族のあり様の変化」について

がんと言う病は，医療技術が進歩するなかにあっても，なお死を意識させる病である。がんに罹患することは，身体的な苦痛だけではなく，再発や転移の不安，将来の不など，心理的・社会的な危機が重複する体験である。本研究の目的は，がんに罹患することによる患者と家族の関係性の変化に着目し，プロセスを明らかにして，変化が家族間に与える相互作用を検討することである。

調査方法は，半構造化インタビューをし，分析は，複線径路・等至性アプローチ（ＴＥＭ）でおこなった。ＴＥＭは，多様なプロセスを丁寧に描き出し，当事者と家族の関係性をシステムとして捉え，何が起こっているのかといった変容に焦点をあて，変容のポイントとなる動的なメカニズムを把握することが出来る分析方法である。協力者は，乳がんと子宮がんの女性２名であり，分析は，個人の経験の深みをさぐることができるとされているため，各々で行った。結果として，家族の関係性の変化は，疾患による衝撃や苦痛を感じながらも，患者は家族や仲間・医療従事者などに支えられながら，社会と相互に作用して変化しているプロセスが明らかになった。さらに，家族の成長や発達と時間的変化によって，家族のホメオスタシスが崩れ新たなシステムが再生され，変化が導かれることもある。一方，ネガティブ・フィールドが働き，逸脱を最小限に留め，安定がはかられることが示唆された。